

## 研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： 認知ミラーリング：認知過程の自己理解と社会的共有による発達障害者支援

2. 研究代表者名及び主たる研究参加者名（研究機関名・職名は研究参加期間終了時点）

研究代表者

長井 志江（東京大学 国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構 特任教授）

主たる共同研究者

熊谷 晋一郎（東京大学先端科学技術研究センター 准教授）

山下 祐一（国立精神・神経医療研究センター神経研究所 室長）

3. 事後評価結果

○評点：

A+ 非常に優れている

○総合評価コメント：

発達障害者の認知的状態を他人に伝えること（認知ミラーリング）や困り事を軽減するために、当事者の視点から定量的に評価できる方法を提案した点が優れている。ロボット等でその原理を解明する認知ミラーリング、神経回路による計算モデル、当事者の社会的行動を分析する当事者研究の3グループからなるチーム型研究で取り組んだ。WHOの定義に従い、身体的な構造や機能に依る「機能障害」と周囲の人や物などの環境要因との相互作用で生まれる「能力障害」に分けて、予測符号化に基づく計算モデル及び認知ミラーリングシステムを開発した点も新しい視点である。その結果、このモデルが、低次の感覚過敏・鈍麻だけではなく、高次の認知機能（発話、描画、協調運動等）に対しても、年齢や精神神経疾患スコアに対応する個人差が定量的に評価できることを明らかにし、認知ロボティクス及び発達心理学、医学の分野で大きな反響を得た。当事者研究でも「自閉スペクトラム症（ASD）知覚体験ワークショップ」（計54回、約4,000名参加）を開催し、ASDに対するスティグマが低減できることを示し、障害者雇用を推進する企業に当事者研究の成果が数多く導入された。